

10/10 サムエル記第一 8章 1-22 節 「主が真の王なのに」

小池 宏明 牧師

全イスラエルの預言者として立ったサムエルは、各地を巡回しながら御ことばを宣べ伝えた。その結果、イスラエルの民は主なる神様を慕い求めるようになった。主は、イスラエルの民の切なる叫び求めとサムエルの執り成しによって、長いペリシテ人との戦いを一旦終結させて、民はようやく平和を得ることができた。これは、主なる神様のみによらざることに伴って与えられた真の平和である。

* 異国人のような王を許可する主

しかし、年老いてきたサムエルは、息子たちの不正にも悩まされた。イスラエルの長老たちは、彼に求めた。「ご覧ください。あなたはお年を召し、ご子息たちはあなたの道を歩んでいません。どうか今、ほかのすべての国民のように、私たちにさばく王を立ててください。」(8:5) サムエルが主に祈り求めると「主はサムエルに言われた。「民があなたに言うことは何であれ、それを聞き入れよ。なぜなら彼らは、あなたを拒んだのではなく、わたしが王として彼らを治めることを拒んだのだから。8:8 わたしが彼らをエジプトから連れ上った日から今日に至るまで、彼らのしたことといえば、わたしを捨てて、ほかの神々に仕えることだった。そのように彼らは、あなたにもしているのだ。」(8:7-8) 主なる神様こそ真の王なのに、異国に倣って人間の王様を立てたいという裏切りのような民の要求を、主は聞き入れられたのである。こうして続く 9 章、10 章で、主なる神様はキシユの子サウルを選び出し、サムエルに油を注がせ、イスラエルで最初の王様としてサウルを立たせた。

* どのような体制であっても

この出来事から、二つのことを学びたい。第一に、主なる神様は、イスラエルの不信仰な要求に対して、ストップをかけない場合があるということだ。主こそ真の王なのに、異国のような強力な王様を立てる必要があると主張する民に対して、主なる神様はそれを受け止めて許容された。このように、主なる神様は、私たちの願いや行いが、主の御心に反していたとしても、すぐにはお止めにならないことがあるかもしれない。私たちが痛い思いをしてでも、学ぶことがあるからだ。

第二に、どのような政治体制であったとしても、罪人である人間が中心であってはならない。主なる神様が真の王として崇められ、賛美されることがないならば、遅かれ早かれ、その国民は滅びに向って行かざるを得ない。これは、国のあり方だけではなく、私たち自身の生き方にも通ずる。私たちはまことに謙って、主なるイエス様のみを崇め、主にのみ賛美をおささげする、そんな生き方を身に付けていきたい。